

生活経済学会第 28 回研究大会
共通論題シンポジウム報告要旨

2012 年 6 月 23 日(土)

明治大学 駿河台キャンパス

生活経済学会 第 28 回研究大会
プログラム委員会

第1日目 6月23日(土)

共通論題シンポジウム (A会場)

テーマ 安全で持続可能な社会をめざして

コーディネーター	一橋大学大学院	米山 高生
パネリスト	明治大学	向殿 政男
	明治大学大学院	
	南三陸町震災復興計画策定会議	中林 一樹
	明治大学	勝田 忠広
	東京大学大学院	木村 学

消費者安全を安全学から見る

明治大学 向殿 政男

持続可能な社会という課題は、エネルギー、食料、水、という資源問題と共に、それらと深く関係をしている大気汚染、地球環境、未来への負荷先送り、等から発せられている。その背景には、安全、安心、安寧を求める人間の価値観がある。それは、未来社会と共に、日々の暮らしの中の安全を求めるところから発している。本報告では、日常生活における安全問題として、こんにやくゼリー問題からエレベータ問題まで、いくつかの消費者に関連する事故の例を紹介し、安全の考え方や安全確保の役割について、安全学という総合的な観点から考えてみる。ここで、安全学とは、安全の理念的側面の下に、安全を技術的側面、人間的側面、組織的側面から統一的に、総合的に考えることを提案する新しい文理融合型の学問である。そして、安全確保の役割とは、消費者、流通業者、製造メーカ、国や行政庁等のそれぞれのリスク低減に対する責任と役割である。本報告の最後に、安全と安心とは基本的には異なった概念であることを示し、安全と安心との関係を明らかにして、いかに安全を安心に繋げるかについて提案をする。

福島原発事故が明らかにした私たちの課題

明治大学

勝田 忠広

一年前に起きた福島第一原子力発電所事故は、市民社会に大きな課題を投げかけた。それは単に「原子力」が持つ潜在的な危険性や放射能の問題、有事における政府や規制当局の在り方だけでなく、巨大技術の持つ社会や環境への影響の大きさ、低線量被曝等に見られる不明瞭な科学的知見に対する市民の対峙の仕方などの多くの課題を残した。しかしながら、これらは新しい問題ではなく、単に先延ばしにされてきた古い課題に過ぎない。

ここでは、最初に、これまでに明らかになった福島事故の状況や問題点を整理する。続いて、「原発は怖い」というのが原発が無くなれば問題は解決するのか、「政府や電力会社が悪い」というのが市民は常に正しいのか、私たちの生活の在り方について考える。

科学の挑戦と限界-地震研究を例として

東京大学大学院

木村 学

2011年3月11日に発生した東日本大震災、東北地方太平洋沖地震は、それに伴う津波発生によって多くの尊い命が失われると共に、福島原子力発電所の破損が放射性物質を拡散させるに至る甚大な被害を及ぼした。このことが、この国の行く末に引き続き暗雲をもたらしている。この歴史的にも未曾有の大災害は、それに立ち向かう科学と技術がいずれも完璧なものではないことをまざまざと見せつけることとなった。それをどのように受け取るべきかについて、関連する科学者、技術者のみならず、国民一人一人が問われる事となったのである。私の専門は地震学ではなく、また地震防災行政にも携わって来てわけではない。しかし、学界の活動を通して近い位置にあり、また、将来大きな地震と津波の発生が予測されている西南日本の太平洋の沖合にある南海トラフという海溝のプレート境界の素過程の理解を目的とした、国際掘削計画（国際統合深海掘削計画、25カ国が参加）に首席研究者の一人として参画してきた。そのような立場から、今回の地震津波災害をどう受け止め、今後何をなすべきかについて、述べさせていただくこととした。